

(6) 講習会四方山話－青空教室方式（現場）が一番－

平成元年（1989）7月のことです。私は十勝専技室に転勤し、現地から依頼された最初の講習会でした。大樹町は、夏期間海霧の発生により、秋まき小麦の生育は中央部より約1週間遅れ、毎年10～30%の穂発芽を発生させ、当時推進していた1等麦100%出荷が出来ませんとのこと。当日は、予定よりも早めに職場を出発し、途中大樹町の数か所小麦畑の乾燥状態を調べ歩いて、中でも最も乾燥していると思われる穂を抜き取り、手のひらで脱粒しますと、既に30%以下に乾燥していることに気がきます。

講習会よりも刈り取りの方が先だろうと内心思いつつ会場に入り、開口一番「刈り取りの予定は？」「来る途中の小麦畑を見てきましたが、結構水分が下がっているようですけど水分調査は？」、「チホクコムギは茎水分よりも穂水分の低下が早いことを知っています？」等矢継ぎ早に質問を出しますが、その反応は鈍いのです。講習会を中断し、全員がほ場に出たの青空教室方式に変更です。

大樹町で最も生育の進んだほ場に案内され、最も生育の進んだ場所の穂を脱粒して見ましたが、生産者は全員して、道端から眺め「35%位かな？あと3日はかかりそうだ？」等の会話です。農協職員にサンプルを持ち帰っていただき、水分測定結果を無線に入れてもらうと「既に28%」との返事。現場にてコンバインオペレータがいることを知るや、オペレータ会議を今晚にでも行うようお願いをし、この日の講習会を終了しました。

平成8年（1996）、私が中央専技室に転勤になった年、北海道米麦改良協会は、全道各地に「ホクシン」の大型展示ほを設置し、後志管内は京極町で実施していました。「ホクシン」は蛋白が上昇しやすいとの特徴をどう解決しますか、土壌肥料の専門家である山口総括専技にも同行を願いました。羊蹄山の直下にあるほ場は無防除であり、「チホクコムギ」が雪腐病被害が甚大であったのに対し、「ホクシン」も被害はあったがその程度は軽く、後志地域での小麦品種は「ホクシン」でなければならないとの印象を深くしました。しかし、小麦栽培が無防除で行われていることに驚きを感じ、雪腐病防除は基本であることの説得に苦勞したことはいうまでもありません。

私が昭和59年（1984）に初めて専門技術員として勤務した場所は北見農試です。昭和60年に「ハルユタカ」が新品種となった年であったと思いますが、北見農試土壤肥料科は“春まき小麦の超多収技術の確立”と題した研究を開始することになりました。

「超多収とは1tですか？」と研究員に尋ねたところ「1tは難しいので600kgにします。」との返事でした。

そのときすでに「生産者によっては600kgを達成しており、超多収とはいえないのでは？」とって研究員に^{ひんしゅく}響きをかいた覚えがあります。この年は、春が早く早期は種により、未曾有な多収年であったことから、私も無謀な事をいったものだと反省の限りです。

しかし、早期は種が多収になるとの技術は、試験場成績にもありますが、私にとって貴重な経験であり、今の私の技術の基礎になっています。

道央地帯での春まき小麦栽培は、赤かび病と穂発芽により、最近5年間その成果を出すことが出来ないことは残念です。今年は、春まき小麦の新品種が誕生したとのこと。その特徴を生かした栽培により、実需からの要望に応える年になって欲しいものです。

<佐藤 允信>



青空教室の講習会